

埼玉県学力・学習状況調査等のデータ を活用した授業改善の取組について

令和7年3月12日

戸田市教育委員会

目次

■ 第1部

- ・埼玉県学力・学習状況調査の概要
- ・県学調の市内の結果やこれまでの取組
- ・より一層の効果的な活用に向けて

■ 第2部

- ・学校現場における効果的な活用について
 - ・戸田市立戸田第一小学校の実践
 - ・戸田市立笹目東小学校の実践

AIでの代替は難しい力などの育成

AIでは代替できない能力の育成と、AIを活用できる能力

生成AIの光（相談的活用）と影

21世紀型スキル、汎用的スキル、非認知的（社会情緒的）スキルを育成

産官学と連携した知のリソースの活用

産官学と連携した知のリソースの活用。それも、ファーストペンギンを目指すことで、安価で効率的に、最先端の質の高い教育が提供されるはず

「経験と勘と気合い（3K）」から「客観的な根拠」への船出

属人的、ポジショントークから脱する → EBPMの重要性の認識（エビデンスベース）

→ episode-based から evidence-based へ

→ evidence-based から evidence-informed へ

→ EBPMからEIPP（Evidence Informed Policy and Practice）へ

授業や生徒指導等を科学する

- 教育の現場は科学的であるべき science based へ
- 優れた教師の経験や勘、匠の指導技術を、言語化・可視化・定量化するなど、暗黙知を共有化したり形式知へ転換したりして、若手が再現できるよう、効率的・効果的に伝承していくべき。そのために教育データを積極的に利活用していく。一方、暗黙知は校内で徹底的に議論し、優れた暗黙知を結集・共有化してチーム学校の強みとする。

■ 授業を「科学する」ことの必要感

- ✓これまで、学校での指導や支援は、教師の経験や勘をよりどころとし、その理由や根拠が明確にされなかった。教師の経験と勘のみによる指導から脱却し、**客観的な根拠に基づく指導や支援に転換**すべきである。
- ✓教師の指導や支援に係る専門的な技術や手法は**言語化・可視化・定量化**されてこなかった。学校課題が多様化、複雑化する中で**匠の指導技術を、暗黙知から形式知へ転換し、共有**すべきである。
- ✓すべての教師の授業改善につながられるよう、**多角的な視点から授業研究を推進**すべきである。



**埼玉県学力・学力状況調査 等、
各種調査の効果的な活用、分析**

調査の目的

児童生徒の学力や学習に関する事項等を把握することで、教育施策や指導の工夫改善を図り、児童生徒一人一人の学力を確実に伸ばす教育を推進する。

調査の対象

県内市町村教育委員会、小・中学校及び義務教育学校並びに小・中学校及び義務教育学校に在籍する児童生徒

- ・小学校 686校（137, 367人）
- ・中学校 351校（128, 883人）
- ・義務教育学校 3校（518人）
- ・県立中学校 1校（234人）



調査の内容

実施学年	調査の内容	
小学校4年生から6年生	国語・算数	質問調査
中学校1年生	国語・数学	
中学校2年生から3年生	国語・数学・英語	



※令和6年度から県内すべての学校がC B T（Computer Based Testing）で調査

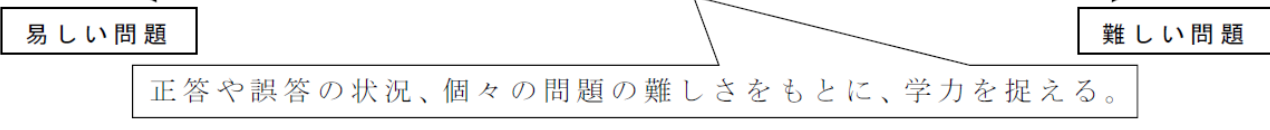
IRT…Item Response Theory = 項目反応理論

(1) 本調査における学力の捉え方

「どのくらい難しい問題に正答できるか」で学力を捉える。

【イメージ】令和5年度に、ある児童（生徒）が受けた調査問題全体の解答状況
 〈全30問の場合〉（○は正答、×は誤答）

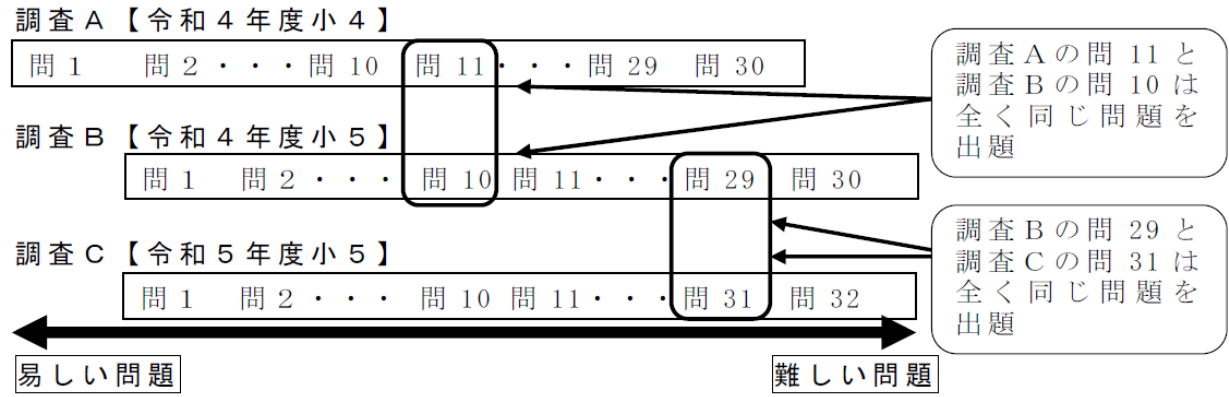
○ × ○ × ○ ○ × × × × ○ × × × × × ×



(2) 年度や学年で、異なる内容の調査結果を比較するための工夫

それぞれの調査に「全く同じ問題」を一部出題し、その問題への正答や誤答の状況を手掛かりとして、すべての問題について「難しさ」を比較する。

【イメージ】
 ※ 調査A、B、Cのそれぞれの調査問題を、難易度順に整列



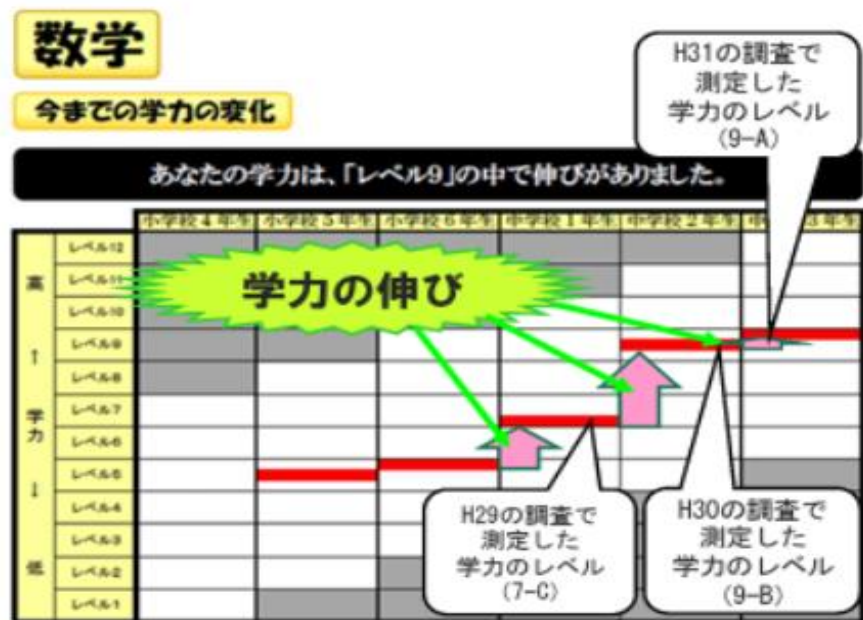
IRTを使用した調査
 ・TOEFL
 ・情報処理技術者試験
 ・PISA調査（OECD）
 等

問題は**非公開**
 子供たちの学力を測るために、年度をまたいで同じ問題を出題する可能性があるため。

埼玉県と全国の学力・学習状況調査の違い

埼玉県学力・学習状況調査	項目	全国学力・学習状況調査
<p style="text-align: center;">小学校4年～中学校3年</p>	<p style="text-align: center;">対象</p>	<p style="text-align: center;">小学校6年、中学校3年</p>
<p>個々の子供たちの学力の伸びや非認知能力等の把握から、教育施策や指導の工夫改善を図り、一人一人を伸ばす。</p>	<p style="text-align: center;">ねらい</p>	<p>義務教育の機会均等や水準の維持向上。学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。</p>
<p style="text-align: center;">非公開</p> <p>子供たちの学力を図るために年度をまたいで同じ問題を出題する可能性があるため。</p>	<p style="text-align: center;">問題</p>	<p style="text-align: center;">公開</p> <p>学習指導要領が目指す資質・能力の育成を踏まえた、具体的なメッセージ。</p>
<p>前年度からの「学力の伸び」や学習方略・非認知能力に基づいて、授業改善の資料とする。</p>	<p style="text-align: center;">結果の取扱い</p>	<p>全国や県の平均正答率が公表されるので、各市町村や各学校は、それぞれの状況を把握する。</p>
<p>県主催の市町村向け活用法研修会を実施。各教科の結果や意識調査の結果をまとめた報告書を作成。</p>	<p style="text-align: center;">解説・資料報告集</p>	<p>報告書に出題の趣旨、解説、回答類型等が記載。授業アイデア例も作成。</p>

■ 「学力の伸び」= 学年間の「学力レベル」の差



本調査では、「学力」を「学力のレベル」として提示

↓

小学校4年生から中学校3年生までのすべての問題に難易度を設定することで「学力のレベル」を測定

↓

年度間の「学力レベルの差」を「学力の伸び」と捉える。

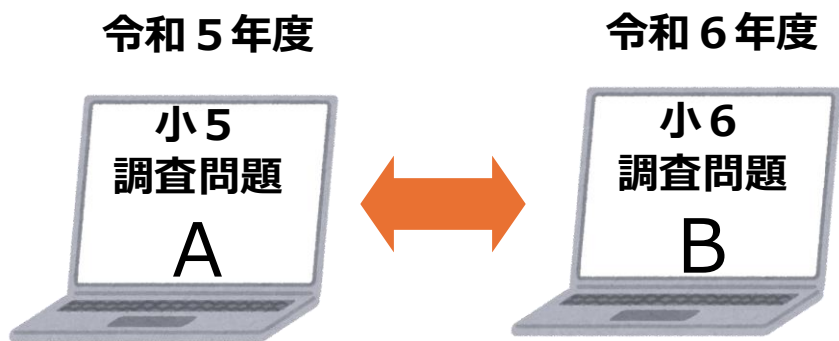
学年	学力のレベル	学年	学力のレベル
小学校4年生	レベル1～7	中学校1年生	レベル4～10
小学校5年生	レベル2～8	中学校2年生	レベル5～11
小学校6年生	レベル3～9	中学校3年生	レベル6～12

それぞれのレベルは、さらに細かく3層（高い順にA→B→C）に分かれている。

- 小4から中3まで、同じ子供を継続的に調査し、個々の伸びを把握できる。



- 異なる学年、異なる年度の調査でも比較可能



- ・問題一つひとつに難易度を設定
- ・A・Bに同一問題を入れ、難易度を調整（問題は非公表）
- ※学力を測るものさし【有】

学力の経年変化を測定可能

非認知能力や学習方略にも注目

(県学力・学習状況調査で測っている非認知能力の例)

認知能力

いわゆる学力であり、
計算、漢字の読み書き、
各教科の知識や技能

非認知能力

認知能力ではない
能力全般



学年	非認知能力	例
一部の学年	自制心	イライラしない 心の平静を保てる など
全学年	自己効力感	自分への自信
一部の学年	勤勉性	やるべきことをきちんとやる など
一部の学年	やりぬく力	粘り強い、根気がある など
一部の学年	向社会性	他者を助けようとする

学習方略とは…学習の効果を高めるために子供が意図的に行う活動

柔軟的方略

学習の仕方を自分の
状況に併せて柔軟に
変更していく活動

<状況>

勉強の順番を変えたり、
わからないところを重点的
に学習したりする など

プランニング方略

計画的に学習に取り
組む活動

<状況>

勉強を始める前に計画を
立てる など

作業方略

ノートに書く、声に出す
といった、「作業」を中
心に学習を進める活動

<状況>

大切なところを繰り返し書く
など

認知的方略

より自分の理解度を
深めるような学習活
動

<状況>

勉強した内容を自分の
言葉で理解する など

努力調整方略

「苦手」などの感情をコ
ントロールして学習して
学習への動機を高める
活動

<状況>

わからないところもあきらめず
に継続して学習する など

■ 本市の今年度の児童生徒の学年別正答率

	小4		小5		小6	
	国語	算数	国語	算数	国語	算数
	平均 正答率	平均 正答率	平均 正答率	平均 正答率	平均 正答率	平均 正答率
埼玉県	51.9	62.6	56.9	53.4	56.7	50.9
戸田市	54.3	63.3	58.1	53.3	57.1	51.3

	中1		中2			中3		
	国語	算数	国語	算数	英語	国語	算数	英語
	平均 正答率	平均 正答率	平均 正答率	平均 正答率	平均 正答率	平均 正答率	平均 正答率	平均 正答率
埼玉県	59.9	53.5	60.3	48.8	61.9	66.4	57.5	54.6
戸田市	62.8	54.6	61.4	51.7	65.4	69.9	61.7	61.4

平均正答率は、ほぼすべての学年、教科で、埼玉県平均を上回っている。

学カレベルの経年変化

※「学カの伸び」はR05～R06 の伸び

		小学校4年生		小学校5年生			小学校6年生			
		R06	学カの伸び	R05 小4時	R06 小5時	学カの伸び	R04 小4時	R05 小5時	R06 小6時	学カの伸び
国語	埼玉県	5-B	—	6-C	6-B	1	6-C	7-C	7-C	0
	戸田市	5-A	—	6-C	6-A	2	6-C	6-A	7-C	1
算数・数学	埼玉県	4-A	—	5-C	5-B	1	5-B	6-C	6-B	1
	戸田市	4-A	—	5-C	5-B	1	5-A	6-C	6-B	1

		中学校1年生				中学校2年生				中学校3年生			
		R04 小5時	R05 小6時	R06 中1時	学カの伸び	R04 小6時	R05 中1時	R06 中2時	学カの伸び	R04 中1時	R05 中2時	R06 中3時	学カの伸び
国語	埼玉県	6-A	7-B	7-A	1	7-A	8-C	8-C	0	8-C	8-B	9-C	2
	戸田市	7-C	7-A	7-A	0	7-A	8-C	8-C	0	8-C	8-B	9-B	3
算数・数学	埼玉県	6-C	6-B	6-B	0	6-A	7-C	7-A	2	7-B	8-C	8-C	0
	戸田市	6-B	6-A	6-A	0	7-C	7-C	8-C	3	7-A	8-C	8-B	1
英語	埼玉県	—	—	—	—	—	—	9-C	—	—	9-C	10-C	3
	戸田市	—	—	—	—	—	—	9-B	—	—	9-A	10-B	2

各学年の平均正答率と分析【小学校 国語】

小4

分類	区分	対象問題数(問)	平均正答率	
			埼玉県	貴教育委員会
教科の領域等	言葉の特徴や使い方	13	63.1	64.3
	情報の扱い方、我が国の言語文化	4	41.8	40.9
	話すこと・聞くこと、書くこと	9	45.5	51.1
	読むこと	4	39.9	42.9
評価の観点	知識・技能	18	55.8	56.2
	思考・判断・表現	12	45.9	51.6
	主体的に学習に取り組む態度	0	-	-
問題形式	選択式	19	56.5	59.1
	短答式	10	43.2	43.4
	記述式	1	51.5	73.4

領域別では、「話すこと・聞くこと・書くこと」の正答率が高い。

小5

分類	区分	対象問題数(問)	平均正答率	
			埼玉県	貴教育委員会
教科の領域等	言葉の特徴や使い方	14	65.1	65.2
	情報の扱い方、我が国の言語文化	3	53.1	53.5
	話すこと・聞くこと、書くこと	6	51.6	55.8
	読むこと	8	48.0	49.1
評価の観点	知識・技能	17	63.0	63.1
	思考・判断・表現	14	49.5	52.0
	主体的に学習に取り組む態度	0	-	-
問題形式	選択式	22	58.7	59.4
	短答式	8	52.3	53.2
	記述式	1	55.1	67.9

問題形式別では、記述式の正答率が県平均を大きく上回っている。



小6

分類	区分	対象問題数(問)	平均正答率	
			埼玉県	貴教育委員会
教科の領域等	言葉の特徴や使い方	15	62.8	63.3
	情報の扱い方、我が国の言語文化	2	55.3	52.7
	話すこと・聞くこと、書くこと	5	52.1	52.5
	読むこと	9	49.4	50.3
評価の観点	知識・技能	17	61.9	62.0
	思考・判断・表現	14	50.4	51.1
	主体的に学習に取り組む態度	0	-	-
問題形式	選択式	23	56.7	57.0
	記述式	1	35.7	42.8

前学年までの協働的な学びや戸田型PBLの推進の成果として、考えたことをアウトプットする力がしっかりと身に付いていると考えられる。

戸田市における児童生徒の学力の状況

正答率が県平均より低い問題についての分析【中学校 数学】

ほとんどの問題で、無回答率が県平均より低い。

数と計算領域の知識・技能の正答率が低い。

困難度 1 1レベルの問題は、正答率が 10%台となっており、無回答率も高い。

中3

問題番号	問題の概要	出題の趣旨	教科の領域等				評価の観点	問題形式	埼玉県	貴教育委員会	困難度レベル	
			数と計算	図形	変化と関係	データの活用						
1(8)	日常生活の場面を表した文を読み、図として適切なものを選び、二元一次方程式として適切なものを選ぶ	数量に着目して、図で表し、二元一次方程式をつくることができる	○				○	56.7	0.8	55.7	0.4	10-C
1(10)	カードをひくときの確率を求める	確率の意味を理解している				○		24.1	5.2	29.8	3.9	11-B
6	カレンダーの数の和について成り立つ性質を説明する	文字を用いて表現したり、目的に応じて式を变形したり、その意味を読み取ったりして手がかりが成り立つことを説明することができる	○				○	18.4	16.9	27.1	12.2	10-B

中2

1(3)	正の数・負の数の入った四則混合の計算をする	正の数・負の数の入った四則混合の計算ができる	○					79.7	0.5	78.2	0.7	6-A
2(7)	反比例の表の空欄に当てはまる数を求める	反比例の関係を表に表すことができる				○		93.1	1.6	92.1	1.2	5-C
3(2)	合同な三角形を並べた図で、一つの三角形を対称移動と平行移動、それらを組み合わせた移動で、重ならない三角形として正しいものを選ぶ	対称移動と平行移動について理解している		○				7.6	1.3	13.2	1.2	11-A
3(3)	立体の見取り図を動かして、正しい展開図を選ぶ。動画を用いる	空間図形の展開図を理解している		○				80.7	0.5	79.1	0.7	6-A
3(5)	グラフの点のy座標が表すものとして正しいものを選ぶ	グラフから必要な情報を読み取り、事象を数学的に解釈することができる		○				68.7	1.0	67.7	0.9	7-A
4(5)	半円を回転してできる立体の体積を求める。動画を用いる	回転体の意味を理解し、体積を求めることができる		○				16.2	14.2	15.4	12.0	11-B
4(6)	おうぎ形の図形を並べ替えて長方形にしたときの説明の中にある空欄に当てはまるものをかく	おうぎ形の半径と弧の長さからおうぎ形の面積の求め方について表せることができる		○				11.0	16.6	11.9	12.4	11-A

中1

1(1)	分数の除法の計算をする	分数の除法の計算ができる	○					76.5	2.4	70.2	3.4	5-A
1(3)	小数及び分数の乗法及び除法の計算をする	小数及び分数の乗法及び除法の計算ができる	○					50.4	10.6	46.8	13.1	7-B
1(4)	小数と分数の四則混合の計算をする	小数及び分数の四則計算ができる	○					42.9	7.9	42.4	8.8	8-C
1(5)	かっこを含む四則混合の計算をする	分数の乗法についても、整数の場合と同じ関係や法則が成り立つことを理解している	○					54.0	7.0	52.6	8.5	7-B
1(6)	小数の逆数として適切なものを選ぶ	逆数の意味を理解している	○					58.2	0.8	55.3	0.8	7-C
2(3)	円の面積を選ぶ	円の面積について理解している	○					53.4	0.5	50.7	0.2	7-B
2(5)	三角柱の体積を求める	角柱の体積を求めることができる	○					56.3	4.8	55.6	5.3	7-C
2(8)	ともなって変わる2つの数量が比例するものを選ぶ	比例の関係の意味や性質を理解している		○				28.1	1.2	27.9	0.9	8-A

〈学力層別の正答率と回答時間の平均（中2数学）〉

学力層 ※正答数順に並べて4分割	回答合計時間 (秒)	1問あたり (秒)
上位層	2222	67.3
中位層①	2262	68.5
中位層②	2220	67.3
下位層	1800	54.5



学力低位層は1問あたりにかける時間が短く、問題ひとつひとつに、じっくりと時間をかけずに回答してしまっていることがうかがえる。

戸田市における児童生徒の学力の状況

学校別にみた、平均正答率と学力の伸びの比較

国語3年	平均正答率		学力を伸ばした児童生徒の割合 (%)	
	正答率	順位	伸ばした割合	順位
埼玉県平均	66.4	—	66.7	—
戸田市平均	69.9	—	75.1	—
A中学校	73.0	1	77.4	2
B中学校	72.0	2	72.7	5
C中学校	71.1	3	69.2	6
D中学校	68.1	4	77.2	3
E中学校	65.6	5	76.1	4
F中学校	63.3	6	77.8	1

平均正答率は県平均を上回っているが、学力を伸ばした生徒の割合は低くなっている。

平均正答率は県平均を下回っているが、学力を伸ばした生徒の割合は高くなっている。

各校の平均正答率だけでなく、学力を伸ばした生徒の割合から伸びの傾向をつかみ、各校への指導に生かしていく。

■ 分析から考えられる本市の児童生徒の学力の状況

- 本市の児童生徒は正答率が県平均より高く、基礎的・基本的な学力が身に付いている。
- 学力を伸ばしている児童生徒の割合が県平均と比べて高く、経年で見ると着実に学力を伸ばしている。
- 無回答率が高く、ねばり強く課題に取り組むことができる。

■ 分析から考えられる課題

- 児童生徒に基礎的・基本的な知識・技能は定着しているか、適切に活用できる力が身に付いていない。
- 自分の考えや表現を意図に応じて適切にアウトプットする経験が不足している。
- 「努力を要する」状況の児童生徒への支援が不足している。
- 直観的に短時間で回答しており、問題についてじっくりと思考していない。



授業改善をとおして、課題の解決を目指す

学校訪問での指導

- 本市では毎年、教育長、教育委員をはじめとした教育委員会事務局が各校を訪問し、学校全体の教育活動の状況を指導・助言する「学校訪問」を実施している。
- 学校訪問では、全教職員が一人一授業を行い、各教科担当指導主事が指導・助言を行っている。
- 各教科の担当指導主事が授業後の指導を行う際に、各学校の強みや弱みをふまえながら、具体的な指導を行っている。



例) 上位層が伸び悩み…学習計画の工夫を助言
無回答が多い…声かけや支援の方策を提案

グッドプラクティスの抽出と共有の流れ

- 子供の学力を伸ばした教師を抽出
- 伸ばした教師から日頃の取組や授業で注力していることを聞き取り調査
- 効果的な取組を明らかにし、市全体で共有

グッドプラクティスから見える、授業改善のポイント

埼玉県学力・学習状況調査の結果から児童生徒の学力を特に伸ばした「教科担当」「学級担任」を抽出し、その教師の「質問紙調査」における質問項目を調査したところ、共通して以下3つの項目に最も力を入れていることがわかった。子供の学力を伸ばした教師の取組（グッドプラクティス）を参考にすること。

- 1 本時の課題を正しく伝え、子供に見通しをもたせること**
 - 課題が「自分事」となる** (子供の具体的姿)
 - 課題を自分の身の置かれた状況として捉え、その解決に意欲を持っている。
 - 解決に向けて具体的・積極的に取り組んでいる。
 - 現状に満足せず、常によりよい解決策を探究している。
 - 単元計画、課題の設定** (教科等、単元や本時による)
 - 教科の特質や単元内容に応じて子供が興味・関心を持てるようにする。
 - 単元、本時の課題を子供の言葉で立てる。
 - 単元、本時のゴールを明示する。
 - 即時の終末に、次に学ぶことは何かを伝える。一斉課題につながる。
 - 導入の工夫** (導入場面)
 - 導入場面にし、実物の提示やICTの活用、日常生活につながる課題設定をする。
 - 問題意識を醸成し出す。
 - 単元、本時でのような資質・能力が身に付くかを教師が判断できる。また、子供が自分ごとができるように伝えられるよう工夫を凝らすことができる。
- 2 子供一人一人の伸びや変容を気にかけて、積極的に認め褒めること**
 - 友達や教師のよさに気付く** (子供の具体的姿)
 - 友達を認め合う言葉や、お互いを励まし合う言葉かけができる。
 - 相手の思いや考えに気付いたり、愛を込めたりすることができる。
 - 自分のよさに気付く。よりよい自分になれるように取り組むことができる。
 - 意図的・計画的** (意図的・計画的)
 - 1週間を「サイクル」と考え、学校の生活リズムを踏まえて、意図的に授業の等、第三子による肯定的な評価を伝える活動がある。(「心の元気が他人にも伝わるような活動がよいね。」と褒めている。)等。
 - 導入の工夫** (導入場面)
 - 結果ではなく過程を認める・褒める。「一生懸命に取り組んでいるね。」「色々な方法を考えたから答えが出せたね。」等。前問紙の中で具体的な声かけを行う。
 - 褒め褒めを活用して認められる材料にする。
- 3 子供の考えを広げ深められるよう、教員を工夫して用いること**
 - 見方・考え方を働かせている** (子供の具体的姿)
 - 会話や筆算、数学の概念・個別の事象を帰納的に集めて、共通点を抽出し一般化している。
 - 互補にならわれ、様々な解決を探究している。
 - 状況に基づいて筋道を立てて考えている。
 - 学習の個性化** (学習の個性化)
 - タブレットを使うか、ノートを使うかの選択が出来るようにする。
 - ※タブレット、ノートのよさを子供が実感していること。
 - 子供の学習習慣や興味に応じて得意な方法で友達と相談したりするなど子供が納得できるように工夫を凝らすこと。
 - ICTの活用** (ICTの活用)
 - ICTが効果的な場面ではICTを活用し、アナログが効果的な場面ではアナログを活用する。
 - 各種ツールを活用する。
 - 各種アプリケーションの共有ノート機能やデジタルホワイトボード機能を活用する。

考えをつなぐ

- 話すこと大切だが、それ以上に「聞くこと」「友達の考えがわかること」を大切に、価値付けする。
- 教師はファシリテーター役になって教師の価値観を押しつけない。目的・ゴールを明確にすることにより、発問しやすいうまく聞き取り、子供たちの学びや気づきを活性化させる。

フナシリワークショップを進めることで、学びの主体を子供たちに

①子供の得意を伸ばす (学びの得意) 教師と生徒が共に学び、1対1の会話で行ってほしい。②子供に気付かせる (学びの得意) 教師が観察で得意な考えを伝える。伝え方についてほしい。③子供の学びに促す (学びの得意) 子供が教師に相談したときに、安易にすぐ答えを教えない。④子供が学びに向かう (個別指導・協働的) 課題の難易度はどうか、クラスは協働的に学びに向かう雰囲気である。

戸田市の「指導の重点・主な施策」に掲載

3

子供の考えを広げ深められるよう、教具を工夫して用いること

目指す子供の姿
見方・考え方を働かせている

〈子供の具体的な姿〉国語や算数・数学の場合
 ・個別の事象を帰納的に集めて、共通点を見出し一般化している。
 ・正解にとらわれず、様々な解法を探究している。
 ・根拠に基づいて筋道を立てて考えている。



学習の個性化

・タブレットを使うか、ノートを使うかを子供が選択できるようにする。
 ※タブレット、ノートのよさを子供が理解しているとよい。
 ・子供の実態や課題に応じて個で考えたり友達と相談したりするなど子供が選択できるようにする。
 ※土台となる学級・教科経営が整っていることが大切である。



ICTの活用

・ICTが効果的な場面ではICTを活用し、アナログが効果的な場面ではアナログを活用する。
 ・思考ツールを活用する。
 ・各種アプリケーションの共有ノート機能やデジタルホワイトボード機能を活用する。

→ P 8, 10へ

→ P 9, 10へ



考えをつなぐ

・話すことも大切だが、それ以上に「聞くこと」、「友達の考えがわかること」を大切に、価値付ける。
 ・教師はファシリテート役に徹して説明や解説は最小限にし、目的とゴールを明確にするとともに、発言しやすい雰囲気をつくり、子供たちの学びや気づきを活性化する。

→ P 5, 6, 7へ

ファシリテーション力を高めることで、学びの主語を子供たちに

- ①子供の発言をつなげる（学びの促進者）：教師と発言した子供と1対1の会話だけで終わっていないか。
- ②子供に気付かせる（学習者中心）：教材研究で得たものを教える・伝えるだけになっていないか。
- ③子供の学びに伴走する（学びの伴走者）：子供が教師に相談したときに、安易にすぐ答えを教えていないか。
- ④子供が学びに向かう（個別最適・協働的）：課題の難易度はどうか。クラスは協働的に学びに向かう雰囲気であるか。

【課題】

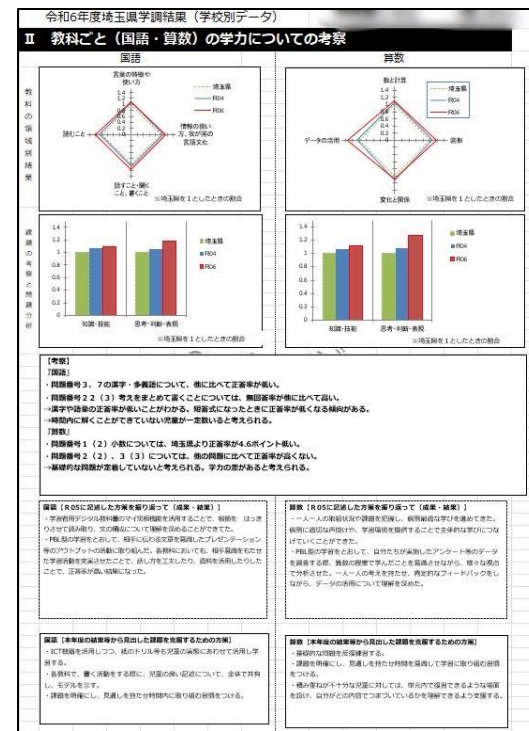
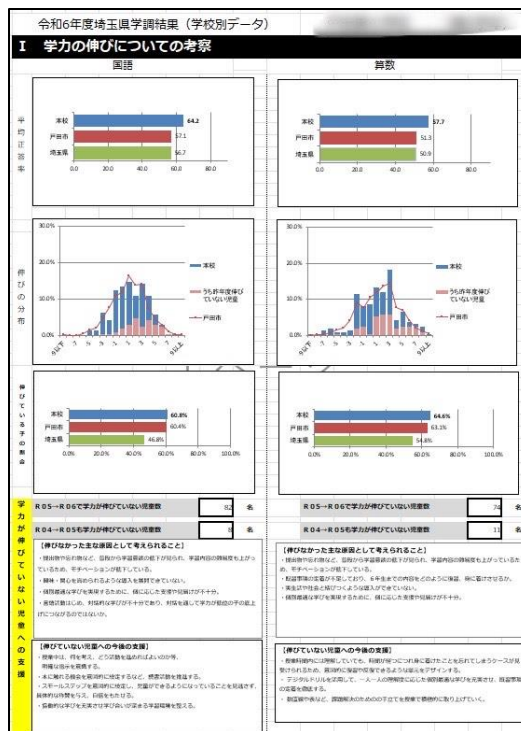
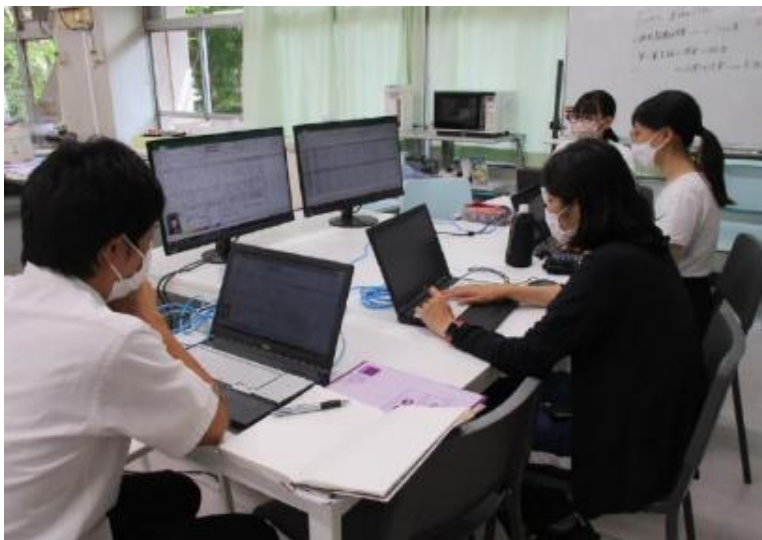
- ・自分の考えや表現を意図に応じて適切にアウトプットする経験が不足している。
- ・「努力を要する」状況の児童生徒への支援が不足している。



学習形態を工夫し、アウトプットの時間と場を確保
 ICTを効果的に活用することで、思考を深める

各校での分析【市教委作成の県学調分析シートの活用】

- 個々の児童生徒の学力の伸びを集計し、重点的に指導が必要な児童生徒を洗い出し、支援策を検討する。
- 学力を伸ばしていない児童生徒のつまずきの傾向や個々の要因を分析し、重点支援の方策や取組について検討する。
- 学力を伸ばしたクラスの教師を特定し、日頃の取組や指導のグッドプラクティスを共有する。



【県学調結果分析シート】

令和6年度埼玉県学調結果（学校別データ）

I 学力の伸びについての考察

国語

平均正答率

算数

平均正答率

伸びの分布を確認

伸びの分布

伸びの分布

伸びていない子の割合

伸びていない子の割合

R05→R06で学力が伸びていない児童数	82	名
R04→R05で学力が伸びていない児童数	8	名
R05→R06で学力が伸びていない児童数	74	名
R04→R05で学力が伸びていない児童数	11	名

【伸びなかった主な原因として考えられること】

- 提出物や忘れ物など、宿題から学習意欲の低下が見られ、学習内容の習熟度も上がっていないため、モチベーションが低下している。
- 興味・関心を高められるような導入を展開できていない。
- 個別最適な学びを実現するために、個に応じた支援や見届けが不十分。
- 基礎学力は、対面的学びが不十分であり、対話を通じて学力が上位の子の域に近づいていない。

【伸びていない児童への今後の支援】

- 授業中は、何を考え、どう活動を進めようとしているか、明確な指示を渡す。
- 本に書かれた機会を意図的に提供し、主体的な学びを促す。
- スモールステップで、具体的な目標を設定し、達成感を味わわせる。
- 授業で積極的に取り上げていく。

学力が伸びなかった原因の分析と解決の方策の検討

令和6年度埼玉県学調結果（学校別データ）

II 教科ごと（国語・算数）の学力についての考察

国語

国語の特色や使い方

算数

数と計算

国語の考察と問題分析

算数の考察と問題分析

教科の解答の傾向を考察

【考察】

『国語』

- 問題番号3、7の漢字・多義語について、他と比べて正答率が低い。
- 問題番号2（3）考えをまとめて書くことについては、無回答率が他と比べて高い。
- 漢字や語彙の正答率が低いことがわかる。短答式になったときに正答率が低くなる傾向がある。
- 時間内に解くことができていない児童が一定数いると考えられる。

『算数』

- 問題番号1（2）小数については、埼玉県より正答率が低い。
- 問題番号2（2）、3（3）については、他の問題に比べて正答率が低い。
- 基礎的な問題が定着していないと考えられる。学力の向上を図る必要がある。

昨年の方策を振り返った効果検証

【国語【R05に記述した方策を振り返って（成果・結果）】

- 学習者用デジタル教科書のマイレージ機能を活用することで、個別最適な学びを進めてきた。
- 一人一人の取組状況や習熟度を把握し、個別最適な学びを進めてきた。
- 個別に適切な声掛けや、学習環境を提供することで主体的な学びにつなげていくことができた。
- PBL型の学習をとおして、自分たちが実施したアンケート等のデータを調査する際、算数の授業で学んだことを意識させながら、様々な視点で分析させることで、課題を明確にし、具体的な方策【R04（2）】を立案した。

今年度の方策を立てる

【国語【本年度の結果等から見出した課題を克服するための方策】

- ICT機器を活用しつつ、紙のドリル等も児童の実態にあわせて活用する。
- 各教科で、書く活動をする際に、児童の強い認識について、全体で共有し、モデルを示す。
- 課題を明確にし、見通しを持たせ時間内に取り組む習慣をつける。

学力の伸びやつまずきの分析をふまえ学習支援に生かした取組例

- 学力を伸ばしていない児童生徒を特定し、その要因を探り、傾向と対策を踏まえ、授業での支援を充実させる。
- 具体的には、学力を伸ばせなかった原因が「きちんと話をきいていないのではないか」と要因を仮定し、それを解決するために「座席の配置を配慮する」「口頭の指示だけでなく、指示を板書する」「1回の指示は1つだけにする」等の手だてを工夫する。

➡ 効果があれば児童をほめ、本人の意欲の向上につなげる。

認知的方略を学習計画に生かした取組例

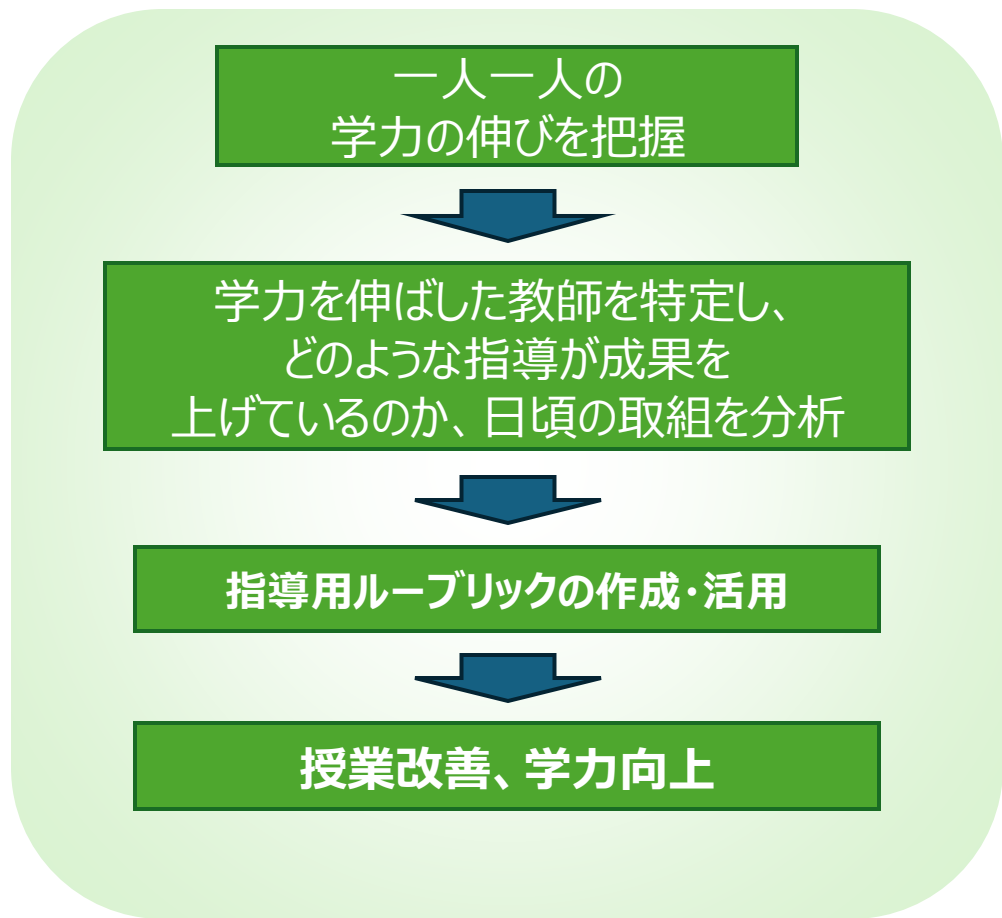
- 個人で考えを構築する時間を十分に確保する。
- グループ活動や体験活動等、自分の考えを共有したり、学びをアウトプットする機会を充実させる。
- 振り返りの時間を確保し、自分の学びについての理解を深める時間を確保する。



認知的方略・・・より自分の理解度を深めるような学習活動。

グループ活動や振り返りの時間を確保することで、自分の理解を深めることができる。

「戸田市アクティブラーニング指導用ルーブリック」を活用した、授業改善の取組



アクティス・ラーニング指導用ルーブリック

アクティス・ラーニングの視点から、**不断の授業改善**を図るため、授業を自己・他者評価する際の基本的な5つの視点を**指導用ルーブリック**として示した。

視点1と視点5は、目指すべき目標と学びの評価であり、これらは**授業の根幹**と捉える。

1 児童生徒が目標を理解し、課題に興味をもって取り組んでいたか。 【目指すべき目標・評価規準の設定等】

- 指導計画に基づき、適切な目標(資質・能力の三つの柱に基づき「何ができるようになるか」)が設定できたか。
- 本時の目標に正対する評価規準・評価方法が設定できたか。
- 児童生徒の学習意欲を高められる導入場面であったか、(学習問題や課題の工夫、提示方法の工夫など)

2 児童生徒が自分の考えを表現することができていたか。 【主に主体的な学びの視点】

- 本時の課題を正しく伝え、見通しをもたせることができたか。
- 自分の考えを表現することができるように、(主につまづいている児童生徒への)支援方法を準備し、支援することができたか。
- 自分の考えを表現することができるように、教具の工夫、適切な時間や場の設定等の準備ができたか。
- 学習活動は、目標の実現につながっていたか。

3 児童生徒が友達の発言を受け止め、自分の意見と比べていたか。 【主に対話的な学びの視点】

- 児童生徒の考えを広げ深められるような、学習形態(個人、ペア、グループ、全体)は設定できたか。
- 児童生徒の考えを広げ深められるよう、教具(具体物、ICT等)を工夫し用いていたか。
- 目標の実現につながるように児童生徒の考えを可視化(ホワイトボード、ICT等)できたか。

4 児童生徒が思考・判断・表現する活動を通して「見方・考え方」を働かせていたか。 【深い学びの視点】

- 児童生徒が本時に働かせるべき「見方・考え方」は、明確であったか。
- 児童生徒に「見方・考え方」を働かせることができる学習活動を設定することはできたか。
- 児童生徒が働かせていた「見方・考え方」を可視化(ホワイトボード、ICT等)できたか。

5 児童生徒が「分かったこと」「やったこと」や「できたこと」など、 学びの成果や課題を実感していたか。 【学びの評価・振り返り】

- 評価規準・評価計画に基づき、本時の児童生徒の学習状況を捉え、個々・グループ等へ支援する(キャッチ&レスポンスする)ことができたか。
- 目標に準拠した指導と評価となるよう、学習の状況を適切に評価することができたか。
- 児童生徒が本時の学習を振り返ることができる場面が設定できたか。

本ルーブリックを授業の振り返りとしてだけでなく、**単元や授業の計画づくりの段階でも積極的に活用**することで、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実につなげ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を図る必要がある。

その際、各々が**児童生徒観**や**教材観**を十分に見つめ、教師としての**指導観**を深め、教材研究を通して**教科の本質**に迫る、**学び**を十分に追究する姿勢を持ち続けることも大切である。〔「観」の視点〕併せて、**教材・学習材・人材**といった学習環境を工夫することで〔「材」の観点〕、子供たちが自ら学びの時間を刻む**「非同期の学び」**が「主体的・対話的で深い学び」につながるよう、教師の働きかけを工夫すること。



16年学校訪問での
達成状況

■ これまでの県学調の活用から得られた成果

- 県と連携した研究や支援により、個々の児童生徒はもとより学級、学年レベルでの学力、**学力の伸びを把握することが可能**になり、グッドプラクティスを把握し、授業改善や教師の指導力向上につなげる**PDCAサイクルを確立することが可能**となった。
- 個々の学習方略や非認知能力も把握することで、**個々の学習状況も含めて把握、分析**ができてきた。



■ より一層の県学調を活用した授業改善に向けて

- 本市は、県平均と比較して学力レベルや学力を伸ばした児童生徒の割合は高いものの、**一部の学年では、学力レベルの伸びがみられなかったりするなどの課題**もある。
- 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を進めているものの、県学調をさらに効果的に活用して本市の抱える課題や児童生徒の学びの実態を把握していきたい。
- そのためには、**県学調における学習状況や非認知能力の結果と学力との比較分析や他の調査・アンケート等（授業が分かる調査、RST等）との分析を行い、多角的にデータを見ていくことが必要**。

■ 戸田市「授業がわかる調査」と「埼玉県学力・学習状況調査」

小・中学校全体

		授業がわかる	授業が楽しい
国語	伸びた学級	85.7%	71.8%
	伸びていない学級	87.2%	73.1%
算数/数学	伸びた学級	75.5%	69.0%
	伸びていない学級	78.8%	70.4%

- 県学調で令和5年度に「学力の伸び」があった学級と、「授業がわかる調査（R5の12月）」の結果のクロス集計を行った
- 「授業がわかる」・「授業が楽しい」という回答した児童生徒の割合は、「学力」が伸びた学級と伸びていない学級で比較しても、大きな違いは見られないという結果になった。

- ✓ 「学力」と「子供が授業が分かる、楽しいと感じること」は別の側面ではあるものの、**これは、県学調単体では分からなかった視点。**
- ✓ **本市の県学調で学力を伸ばした教師のグッドプラクティスの共有を図っていく取組においても県学調の質問紙調査の結果等を含め他のデータやアンケート等と比較分析して行う必要がないか。また、その場合に活用できる指標としてどのようなものが考えられるか。**

全国学力・学習状況調査 結果を用いた授業改善

各校では、県学調同様に、全国学調についても、各教科の問題分析や個別の学力の分析・把握を行い、授業改善を図っている。



各学校での分析・授業改善（実践例）

問題分析・教科書分析

- ・各教科の問題分析
- ・教科書との関連を分析
- ・出題意図
(求められている力)の確認



児童生徒の実態把握と改善策の検討

- ・児童生徒の解答を分析
- ・児童生徒の結果の要因
について授業分析
- ・改善策の検討



授業実践

- ・改善策の実践
- ・授業アイデア例を活用した授業実践
- ・学習効果が高いと考えられる学習活動の共有



次年度へ向けて

- ・実践した取組の学習効果について分析
- ・継続する取組、改善点について検討

教科等横断的な視点からの授業改善を重視

参考 「授業がわかる調査」 (授業に対する感じ方) を分析

戸田市では平成16年度から「授業がわかりますか」「授業が楽しいですか」という子供に対するアンケート調査を行っており、授業改善に活用。令和3年度は戸田市における各学年、各教科の傾向を分析した。

主な結果①

全体的に「わかる」よりも「楽しい」の方が、学級による違いが大きい。(特に小学校)

表3「わかる」の分散指標 (※3)

	教科平均	国語	社会	算数/数学	理科	英語
小4	0.26	0.25	0.93	0.71	0.41	
小5	0.35	0.75	0.98	0.87	1.11	
小6	0.29	0.39	0.57	0.51	0.82	
中1	0.35	0.36	0.85	1.56	1.62	0.97
中2	0.63	0.77	1.97	0.95	1.75	1.25
中3	0.49	0.58	0.77	0.78	1.24	1.02

表4「楽しい」の分散指標

	教科平均	国語	社会	算数/数学	理科	英語
小4	0.67	0.89	2.33	1.32	0.88	
小5	0.94	1.73	2.67	2.60	2.31	
小6	1.44	2.51	1.52	1.70	2.56	
中1	0.47	1.05	0.98	2.80	1.93	1.04
中2	0.77	1.17	2.41	1.93	3.10	1.32
中3	1.13	1.29	2.09	1.77	2.00	1.81

考察

理解することも大事だが子供達が何を楽しいと感じるかに留意しつつ、教科の本質的な楽しさをいかに伝えられるかに腐心すべき。

分散指標は分散の値に10を乗じたもの。数字が大きいほど学級間のばらつきが大きい。

主な結果②

「わかる」と「楽しい」の関係性は、高校受検が近づくと弱くなる傾向。(特に国語・社会・数学)

表5「わかる」と「楽しい」の相関係数 (※4)

	教科平均	国語	社会	算数/数学	理科	英語
小4	0.63	0.55	0.76	0.59	0.49	
小5	0.73	0.61	0.85	0.74	0.88	
小6	0.71	0.66	0.53	0.56	0.69	
中1	0.60	0.53	0.72	0.72	0.72	0.54
中2	0.76	0.53	0.71	0.14	0.86	0.60
中3	0.58	0.34	0.47	0.28	0.75	0.63

考察

わかるけど楽しくないと感じる子供が多くなる。子供が主体となり、学習内容を探究したりアウトプットしたりすることが重要。

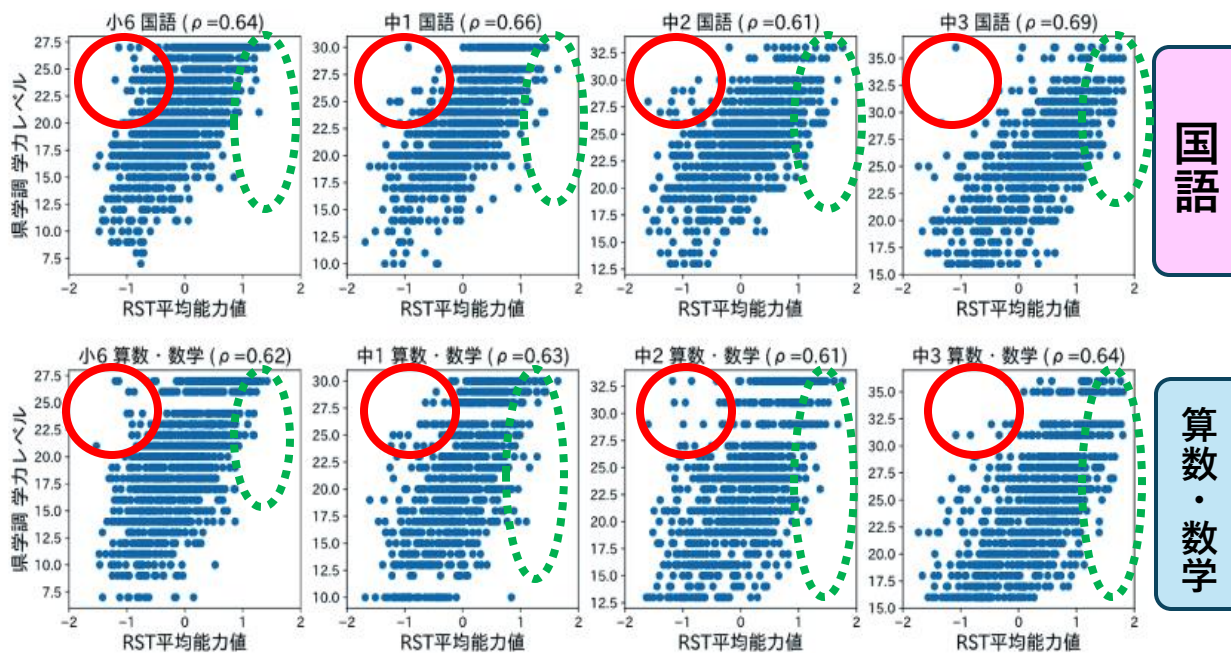
相関係数は「わかる」と「楽しい」の関係性の強さ。およその目安として、0.8以上で強い相関、0.7~0.8でやや強い相関、0.5~0.7で弱い相関があるといえる。

学年や教科によって授業に対する感じ方の傾向が異なるため、その傾向に応じて授業改善を進める必要がある。

リーディングスキルの育成・研究について

(1) リーディングスキルテスト結果と埼玉県学調の相関分析

下図は、本年度のRST全受検者について、上記4タイプの読解能力値の平均値（横軸）と、令和元年度の埼玉県学調（国語および算数・数学）における36段階の学力レベル（縦軸）との関係を図示したものです。図中の ρ は相関係数と呼ばれる統計値で、-1から1の範囲の値を取り、受検者の2つの特性（読解能力値と学力レベル）の関係が直線的である度合いを表します。全ての学年及び国語と算数・数学の両教科で相関係数は0.61~0.69の範囲であり、RSと学力レベルには明らかな正の相関があることが分かります。



○は、今後の学習でのつまづきが心配される児童生徒
 ○は、RSの能力値が高い生徒は中3後期（入試時期）の一般的なテストの伸びも高い。

一とだっ子 やり抜く力で 未来に夢を—

平成30年度
戸田市教育研究集録

戸田市教育フェスティバル開催

一とだっ子 やり抜く力で 未来に夢を—

令和元年度
戸田市教育研究集録

戸田市教育フェスティバル開催

一とだっ子 やり抜く力で 未来に夢を—

令和2年度
戸田市教育研究集録

「令和の日本型学校教育」の構築を目指して
 中央教育審議会委員のお二人より御寄稿をいただきました。
 「令和の日本型学校教育」（個別指導学習と個別指導学習）がめざすところ

一とだっ子 やり抜く力で 未来に夢を—

令和3年度
戸田市教育研究集録

戸田市教育フェスティバル開催 **オンライン開催**
 令和4年1月10日（日）、戸田市立教育センターにて「戸田市教育フェスティバル」を開催し、学校の教職員がWEB会議システムによるリアルタイム配信を駆使する新しい形で開催を行いました。今年度は、「子どもを笑顔にする学校をつくるために」をテーマに、現職教員、教職員支援機構

一とだっ子 やり抜く力で 未来に夢を—

令和4年度
戸田市教育研究集録

戸田市教育フェスティバル開催 **オンライン開催**
 令和5年1月10日（日）、戸田市立教育センターにて「戸田市教育フェスティバル」を開催し、学校の教職員がWEB会議システムによるリアルタイム配信を駆使する新しい形で開催を行いました。今年度は、「子どもを笑顔にする学校をつくるために」をテーマに、現職教員、教職員支援機構

講演テーマ **メディアリテラシー教育の本質とは何か** 渡辺 真由美

スティーブンス メディア研究所

「子どもを笑顔にする学校をつくるために」をテーマに、現職教員、教職員支援機構

戸田市教育委員会

匠の技の可視化に係る研究（ハイラブル）

- 対面の話し合いをたまご型レコーダー（ハイラブル社製）で録音し、客観的なデータを基に話し合いを可視化。
- 教師のどのような声かけや発問が児童生徒の学びに影響を与えているのかについて検証。

令和3年度 市内5校

令和4年度 市内2校

令和5年度 市内2校

【検証1】 児童生徒の学習時の発話量の時間変化より



上グラフによると、教師の精選した意図的な発問によって、話し合い活動において児童生徒の発話量が増える傾向が見られた。特に、以下のような発問の際に高い数値となった。

- *〇〇さんは、なぜたし算をしたのかな（つなげる）
- *〇〇さんは、何に着目したのかな（深める）

※R3指導の重点・主な施策p4③発問による授業づくり参照

また、教科の特質に応じた見方・考え方を児童生徒が働かせている様子も見られた。発話量からも主体的に話し合いが行われている結果が見られた。

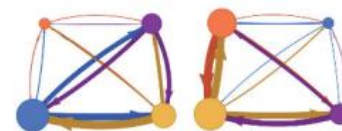
【検証2】 話し合いデータを児童生徒が活用した取組より

児童生徒が自分たちの話し合いをデータに基づき客観的に把握する時間を授業内で意図的に設定し、教師による中間指導も含め、グループ内の関わり合いや発話量について確認をするようにした。

そうすることでその後の話し合いの見通しがもてるようになり、多くのグループで前半の話し合いより主体的に関わろうとする様子が見られ、行動の傾向分析からもその変化を見ることができた。



【検証3】 発話の関わり合い（ターンテイクより）



多くの授業において、話し合いのグループが4～5人で編成されていたが、ターンテイクを見てみると、グループの多くで、上データのように主体的に話し合いに参加できないメンバーが必ず1名以上存在することが分かった。3人グループの際には、比較的関わり合いのバランスがよく、個人的な発話量、重なり度、盛り上げ度についても伸びが見られる結果となった。

「授業がわかる調査」 (授業に対する感じ方) を分析

戸田市では平成16年度から「授業がわかりますか」「授業が楽しいですか」という子供に対するアンケート調査を行っており、授業改善に活用。令和3年度は戸田市における各学年、各教科の傾向を分析した。

主な結果①

全体的に「わかる」よりも「楽しい」の方が、学級による違いが大きい。(特に小学校)

表3「わかる」の分散指標 (※3)

	教科平均	国語	社会	算数/数学	理科	英語
小4	0.26	0.25	0.93	0.71	0.41	
小5	0.35	0.75	0.98	0.87	1.11	
小6	0.29	0.39	0.57	0.51	0.82	
中1	0.35	0.36	0.85	1.56	1.62	0.97
中2	0.63	0.77	1.97	0.95	1.75	1.25
中3	0.49	0.58	0.77	0.78	1.24	1.02

表4「楽しい」の分散指標

	教科平均	国語	社会	算数/数学	理科	英語
小4	0.67	0.89	2.33	1.32	0.88	
小5	0.94	1.73	2.67	2.60	2.31	
小6	1.44	2.51	1.52	1.70	2.56	
中1	0.47	1.05	0.98	2.80	1.93	1.04
中2	0.77	1.17	2.41	1.93	3.10	1.32
中3	1.13	1.29	2.09	1.77	2.00	1.81

考察

理解することも大事だが子供達が何を楽しいと感じるかに留意しつつ、教科の本質的な楽しさをいかに伝えられるかに腐心すべき。

分散指標は分散の値に10を乗じたもの。数字が大きいほど学級間のばらつきが大きい。

主な結果②

「わかる」と「楽しい」の関係性は、高校受検が近づくと弱くなる傾向。(特に国語・社会・数学)

表5「わかる」と「楽しい」の相関係数 (※4)

	教科平均	国語	社会	算数/数学	理科	英語
小4	0.63	0.55	0.76	0.59	0.49	
小5	0.73	0.61	0.85	0.74	0.88	
小6	0.71	0.66	0.53	0.56	0.69	
中1	0.60	0.53	0.72	0.72	0.72	0.54
中2	0.76	0.53	0.71	0.14	0.86	0.60
中3	0.58	0.34	0.47	0.28	0.75	0.63

考察

わかるけど楽しくないと感じる子供が多くなる。子供が主体となり、学習内容を探究したりアウトプットしたりすることが重要。

相関係数は「わかる」と「楽しい」の関係性の強さ。およその目安として、0.8以上で強い相関、0.7~0.8でやや強い相関、0.5~0.7で弱い相関があるといえる。

学年や教科によって授業に対する感じ方の傾向が異なるため、その傾向に応じて授業改善を進める必要がある。

➤ コンピテンシーを測定するAi GROWと学力との相関分析。

学力とコンピテンシーの関係

全体的に正の相関がありました（学力が高いとコンピテンシーも高い）。特に、小学校では論理的思考、中学校では論理的思考、課題設定、疑う力、表現力でその傾向が強く、これらのコンピテンシーは学力向上のための授業改善に位置付けると効果的と考えられます。一方、その他のコンピテンシーを向上させるには学校の取組や学級経営等に意図的に位置付けることがより重要となります。

	創造性	論理的思考	個人的実行力	自己効力	共感・傾聴力	決断力	疑う力	課題設定	耐性	表現力	柔軟性	影響力の行使	地球市民
小_国語	0.399	0.478	0.389	0.360	0.372	0.353							
小_算数	0.373	0.429	0.368	0.354	0.324	0.332							
中_国語	0.373	0.488	0.382	0.335	0.364	0.385	0.443	0.442	0.277	0.429	0.385	0.334	0.385
中_数学	0.408	0.515	0.398	0.381	0.333	0.397	0.450	0.454	0.286	0.464	0.376	0.375	0.398
中_英語	0.387	0.557	0.419	0.377	0.383	0.436	0.466	0.474	0.309	0.469	0.417	0.372	0.410

（表中の数字は相関係数、赤字は比較的強い相関関係があったことを示す。学力は平成31年度埼玉県学調結果を利用）

コンピテンシー向上に有効と考えられる取組

創造性	複数人、男女混合、多様性、単元ごとなど、グループ分けを意識して指導に取り入れる。心理的安全性を考え、同質性も考慮する。
自己効力	担任が毎日の帰りの会で1人ずつ、皆に見えていないところを褒める。「先生は常に見てくれている」という安心感と代理成功体験につながる。
共感・傾聴力	男女間の心理的安全性が確保された状態でグループ活動を行い、意見を否定せず褒め合う。教員役や1年生役など、相手の立場になり切る活動も有効である。

コンピテンシーが向上したクラスの担任の先生方に、日常の実践についてヒアリングを行いました。その結果を以下の表に示します。

論理的思考	市のプログラムや思考ツール、ICTを活用し、結論を導いた理由付けやプレゼンテーションを行う。
個人的実行力 決断力	新しいイベントの立ち上げや学年縦割り活動のリーダーなど、経験したことのない役割を一人一人主体的に行う。

① データ利活用の考え方

学習指導要領総則の解説には「各学校においては、各種調査結果やデータ等を活用して、児童生徒や学校、地域の実態を定期的に把握し、そうした結果等から教育の目的や目標の実現状況や教育課程の実施状況を確認し分析して課題となる事項を見だし、改善方針を立案して実施していくことが求められる。」と示されている。一見するとデータ利活用は「学校として取り組むもの」と思われるかもしれないが、個々の教師の活動の積み重ねが学校の教育課程であること、データ利活用が授業改善の一側面であることを考えると、データの利活用は教育活動をより良くするための普遍的・日常的でポジティブな営みであるといえる。

これらを踏まえて、日々の活動に以下のような実践例を各学級で取り入れることで、様々な視点で子供たちを見取り、子供たちの思いを反映させられるような授業改善を進めていくことが望ましい。

子供たちの姿容のために現状を定量的に把握することからスタートし、

R-PDCAサイクルを適切に回すことで学習指導等の在り方を変えていくことが重要。



② データ利活用の実践例とポイント

(例) 授業の理解度や教科への興味関心を高めたい → Rで「授業がわかる調査の項目」を流用

R 授業がわかりますか？（理解度）
授業が楽しいですか？（興味関心）を開く
(Google フォーム活用で短時間で可能となる)

結果例

パターン① 興味関心は高いが理解度が低かった	パターン② 理解度は高いが興味関心が低かった
----------------------------------	----------------------------------

Point: 計画や目標を立てるには、R (Research) により子供たちの現状を可能な限り把握しておくことが大切。

P 結果の理由や背景を分析し、解決策やその目標を設定する。

パターン① 例えば、分析の観点に過去の「指導の重点・主な施策」のグッドプラクティスを用いる。特に自分で実践できていないポイントがあれば、次の単元や次の学期では必ず毎回の授業でそのポイントを実践するといった目標を設定する。	パターン② 学習内容の意義を伝えられているか、子供との関係性を構築できているか、子供は安心して授業に臨んでいるかなど、「楽しさ」を様々な子供の視点に立って検討する。そこから自分で仮説を立て、仮説に応じた具体的な解決策を設定する。
--	--

Point: 解決策はできるだけ具体的に、期間（この例の場合は単元ごとや学期ごと）も含めて設定する。

D 設定した解決策を実施する。 **C** 設定期間終了後に同じ質問を行い、解決策の効果を検証、必要に応じて補足的な調査を行う。 **A** 次のサイクルを回す。

Point: 数値は参考にするが、子供の見取りを大事にする。そして設定した目標の観点で自分の行動を振り返り、行動改善できたかが重要である。

Rの別の視点 自分の授業実践を振り返りたい → Rで「埼玉県学調の質問紙項目」を流用

質問例：○学期の◇◇(教科)の授業で次のようなことはどれくらいありましたか？

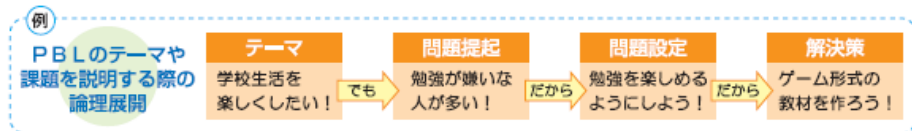
- 授業の始めに、今日はどうな学習をするのかをつかんでから学習に取り組んだこと
- 授業の終わりに、授業で学んだことをふり振り返り、自分がわかったことやわからなかったことを理解したこと

Point: 指導実践に対する認識は、教師と子供の間にギャップが生じやすい。上記の質問はそれぞれA-L指導用ルーブリックにおいて授業の根幹としている視点1と視点5に関するもので、授業の見直しと振り返りを実践できているか子供の視点で確認できる。

Researchの入口
QRコード
児童生徒向けのアンケート (Google フォーム) を Google ドライブ上に保存

人に何かを伝えるときや問題や課題について分析するとき、データを活用することは説得力を高めるために非常に有用である。ただし、単にデータを用いれば説得力が増すわけではなく、土台となる論理がしっかりしていなければ効果が半減してしまう。

効果的なデータの活用に向けた基礎的な論理的思考を取り入れていくことが重要である。



▼疑問が浮かぶケース①：選択肢を検討したか
・勉強に着目したのはなぜだろう？
・ゲーム形式の教材に着目したのはなぜだろう？

そうならないために

ポイント① 物事の要素をできるだけ「漏れなく重複なく」整理しよう！

要素分解のロジックツリーが有効！

学校生活

- 勉強
- 行事
- 自由時間
- 委員会やクラス等

※活動の種類という切り口で要素を分解
※切り口によって注目する要素は変わる

扱う内容の要素ってそれだけ？他にはない？

例えば、「勉強が嫌いな人の割合が多い」というデータを提示するよりも、要素分解した項目も含めた「他の活動と比べて、勉強が楽しいと答える人の割合が低い」という網羅的なデータを利用する方が、論理の展開について納得する人が増える。

▼疑問が浮かぶケース②：因果関係は妥当か
・勉強を好きになれば学校生活が楽しくなる？
・本当に勉強を楽しめるようになるだろうか？

そうならないために

ポイント② 因果関係（だから～、なぜなら～）が納得できるものが確認しよう！

ゲーム形式の教材を使うと

- 説明がないと本当に？と感じる人が増えやすい。
- 勉強を楽しめる
- ゲーム形式の教材を使うと わくわくする要素が多く 勉強の手法自体に興味を持てるから 勉強を楽しめる

なぜ？を突き詰める！

論理展開に関係する情報を集め、なぜ？を丁寧に説明できるとよい。

例えば、「勉強が苦手な理由や勉強をされていて楽しいと思う瞬間」などをアンケートで聞いてみたり、「どのような勉強方法があって、皆はどの方法に興味を持つか」を調査してみたり、因果関係を補強する形でデータを利用すると、論理の展開について納得する人が増える。

相手に何か伝えるときは「自分が分かるから相手も分かるはず」ではなく「誰が聞いても分かるだろうか」という姿勢（前提や立場の違いを意識）で内容を見直す。論理展開がしっかりしてこそ、データ活用の効果が生きてくる。